第４章 近代和歌山の発展

しのび寄る戦争の足音

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

青い目の使節人形と答礼人形

青い目の人形・エミー嬢（宇久井小学校蔵）

昭和のはじめごろ，アメリカ合衆国本土で，日本人の移民を排斥する運動がおこり，日米両国の間でたいへん大きな問題になりました。このとき，両国の子どもたちに，友情の人形交換をさせようという運動が起こりました。

1927（昭和２）年２月，約12,000体の青い目の人形が，アメリカから贈られてきました。当時の新聞は「人形使節」と伝えています。この青い目の使節人形は，和歌山県に177体が贈られたといわれます。

西牟婁郡上富田町立朝来小学校の学校沿革史に，「平和の使者人形バァージニア嬢の歓迎会を開いた」と記されています。また同町立岩田小学校でも，５月７日に「日米親善の使者人形リリアン嬢の歓迎会を行った」と記されています。

このように青い目の人形を贈られた県内の各学校では歓迎会を開いて温かく迎えました。そのうちの東牟婁郡那智勝浦町立宇久井小学校に贈られたエミー嬢は，今も大切に学校で保管されています。

青い目の使節人形に対して，日本からも人形を贈って答礼することになりました。その費用は日本全国の小学生たちの募金によりました。東京や京都の選ばれた人形師によって高さ約90cmほどもある58体の人形がつくられ，それぞれに美しい和服が着せられました。これらの人形は，答礼人形として，各道府県名や都市名をつけられて，アメリカ各州に贈られました。ミス和歌山と名づけられた人形も贈られました。

野村吉三郎とウェヴスター辞典

和歌山中学校を卒業した野村吉三郎は，1896（明治29）年，海軍兵学校を卒業して，アメリカ大使館など欧米諸国に駐在して，国際派の軍人となりました。1932年に第３艦隊司令長官に就任し，翌年海軍大将に昇進しています。1937年４月，39年勤めた海軍を引退して予備役となり，学習院の院長に就任しました。これは，皇太子（現天皇）の初等科入学の準備にあたるためであったといわれています。野村の教育方針は，「人間をつくる教育」に徹し，院長としての学校運営も成果をあげていました。教職員や学生生徒にも信頼と敬慕の念をあつめていましたが，1939年９月，阿部信行内閣の外務大臣を命じられ，翌年

11月には，特命全権大使に就任して，アメリカに駐在しました。それは，悪化しつつあった日米関係の調整にあたるためでした。

1941年４月から，野村駐米大使とハル国務長官の正式会談がはじまりましたが，日本政府の中にアメリカとの交渉に積極的に賛成せず，対アメリカ・イギリスとの戦争を覚悟のうえで東南アジアへの進出を考える勢力がいて，野村の交渉は難航しました。1941年９月の御前会議で，10月上旬までアメリカとの交渉がまとまらないときは，アメリカ・イギリスとの開戦をすると決定しました。交渉は中国からの日本軍の撤退と日本・ドイツ・イタリアの３国同盟の解消を求めるハル長官と，それに反対する日本の間で妥協を見い出せなくなりました。野村はその間，アメリカとの戦争回避に死力を尽くしていました。しかし，12月８日，日本はハワイ真珠湾の奇襲攻撃をしたため，太平洋戦争に突入しました。

野村ら大使館員や，民間商社の社員とその家族は６か月に及ぶ抑留生活を送ったのち，日本へ送還されました。

野村は帰国のとき，５冊のウェブスターの辞典をみやげに買ってきました。母校の和歌山中学校，海軍経理学校と学習院などで，日本の将来を担う若者の勉強に役立てたかったからです。

帰国後間もなくの９月，野村は辞書をみやげに和歌山中学校を訪問し，全校生徒に英語の勉強に励むように講演しています。敵国語として排斥された風潮の中で，英語教育の大切なことを話す野村の話は，国際人として生きてきた人らしい贈りものでした。

ウェブスター辞典の表紙と表紙裏に書かれた野村吉三郎の自筆
（桐蔭高校蔵）

わかやまの知識 コラム

【陸軍歩兵第61連隊】

日露戦争により，わが国はさらに軍備を強化しました。1905（明治38）年７月に歩兵第61連隊が新しく編制されると，和歌山市や和歌山商工会議所は，和歌山市へ誘致しようとしました。日露戦争の不況を回復できると考えたからです。市債を発行してその資金で買い入れた今福の土地を提供しました。

1909年から連隊の駐屯がはじまりました。「ロクイチ」とよばれた兵士は和歌山県出身者が中心であったことから，郷土部隊として県民にも親しまれました。日中戦争直前の1937（昭和12）年４月，61連隊は「満州」（中国の東北）に渡りましたが，日中戦争がはじまると，61連隊も各地に転戦して抗日戦争を続ける中国軍や人民と戦わなければなりませんでした。

やがて，太平洋戦争がはじまると，フィリピンへ配置がえされ，1943年にはスマトラ島，さらにビルマ（ミャンマー）の戦線へ連隊の主力軍が移りました。そして，もっとも悲惨な戦闘といわれたインパール作戦に参加し，後退する日本軍の最後尾を受けもちました。米英軍のはげしい追撃にさらされて，連隊の約半分にあたる780余人の兵士を失う大悲劇となりました。

生き残った兵士たちは，1946年６月，多くの仲間を失いつつも，なつかしい和歌山へ帰ってきました。